「恋姫の世界に」

江田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「恋姫の世界に」

【Ｎコード】
Ｎ００３４Ｈ

【作者名】
江田

【あらすじ】
光り輝く衣を纏いし武人、その者は天より使わせられるその心は大陸に生きる王ただ１人に捧げ、その命尽きるそのときまで認めた王と共にある武は心を捧げし王の為に、知は共に生きる民の為に揮うその武人の名は――

序（前書き）

江田です。
また書き直しております。
暫定なので文章の粗さが目立ちますが、それでもよろしいという方は暖かい目で見ていただけると幸いです。

序

『序．日常の終り』

日が過ぎるごとに、歳を追うごとにどこからか流れ込んでくる力。

昨日出来なかったことが今日はうまくできる。

先週負け越していた母親との試合で今週は勝ち越した。

１３年前家の事情を知って修行を始めた当初は無理だと思っていた技の継承は、去年会得し終わって高校卒業と同時に俺は北郷家の当主となる。

今俺がやっているのは技を完全に極めること。

祖母から母へ、母から俺へと引き継がれてくる予定の村雨を手に、素振りを何回、何十回、何百回と繰り返す。それを積み重ねて得るのは自分自身への信頼。

そうやって得た力を俺が発揮するまであと僅か。

最後の一年くらいは、普通の学園生活を…

＊

聖フランチェスカ学園

その学園の中に新しく建設された歴史館。

何を思ったか、学園長は新しく出来たこの施設に置いてある展示品を見て感想文を書くように、全生徒に宿題の形で出した。1年2年はともかく、受験がそこまで迫った3年生にまで感想文を求めるその手腕、生徒も教師も首を傾げた。

そこに向かうための並木道を学園の制服を着込んだ2人が歩いていた。

「かずピーが学校に通うことになるなんて珍しいやん」

「卒業後にはこういった日常とは掛け離れた生活から抜け出せなくなるからな。最後の1年くらいは目を瞑ってくれるそうだ」

「災難…いや、かずピーの宿命かいな」

「そうだな。天皇に仕え刺客から守るために闘うのが俺の宿命だな。及川といれるのも本当にあと1年ってことだ」

学園に入学したての時にできた友達第1号。一応俺の中では数少ない親友の席に座っている1人だ。

「かずピーってさ、周りから思われとるほど鬼畜や無いのに『四家』のひとつってだけで敬遠されとるからな。ワイくらいは一生親友で、悪友でいたるさかい安心せえな」

「ああ。ありがとう」

「照れるやないか…さっさと行こうでかずピー」

俺は及川に出会えなかったら、この学園で最後の青春1年間を過ごす気にはなれなかっただろうな。本当に感謝しているよ。

俺は照れて早足で行ってしまった親友の後を追った。

歴史館は新しく出来ただけあって

「男子寮とは比べもんにならへんな」

「それは言わないお約束だ」

こんなものに金を掛けるのであれば、女子寮とまでは贅沢を言わないがいい加減プレハブから脱して欲しいと思う男子学生は多いだろう。

「気を取り直して突撃〜」

「明らかにテンションが下がるな。これだけ立派だと」

俺の脳裏にも生まれ変わった男子寮が瞼の裏に映って消えた。

最後の1年で男子寮が生まれ変わることはまず無いから。

「これっていつのもんなんや？」

歴史館の中のブースを回っていて及川が興味を示したのは銅鏡のコーナーだった。俺はどちらかというと刀剣類に目を惹かれたのだけど。

「説明文によれば後漢末期…だとすると三国志の辺りだと思うが」

「ほえ～。ほんもんかいな？」

「だろうな。良く探してきたものだと思うよ。さっき俺が見ていた刀剣類も7割がた本物だったからな」

「あと3割は？　分かった。聞かんほうがええな」

俺が及川からの質問を流した瞬間に、彼は聞いてはいけないものだと理解したようで目を逸らした。

「でもかずピー？　後漢末期ってだけでようも三国志って言葉が出てきよったな。もしかして隠れファンか？」

「残念…この前テレビでやっていた『三国志の英雄は全て女だった』っていう持論の考古学者の番組を、俺と親父と爺さんの3人で座禅しながら見ていたんだ」

「ああ～。そういやあったな。でも、アレ見ていて思ったんやけど…なんてエロゲ？」

「大人の中にも少年の心を忘れないで追いかけ続ける分類の人間がいるってことだろ」

俺は失笑しながら辺りを見回す。するとさっきまで俺と及川の2人で陣取っていた銅鏡のコーナーの所に1枚の鏡を凝視する男がいた。

「どないしたんや？　かずピー」

「いや…あいつ、俺たち側の人間かもな」

「わかるん？」

「足捌き、重心移動、肉の付き方…どれを採っても俺たち側（裏側）の人間だよ」

俺たちの視線に気付いたのか、こちらににやりと笑みを向け去っていく男を見ながら俺は悶えている及川の背中を叩いた。

「痛いわ！　かずピー」

「大丈夫だ。俺たちはノーマル」

「せやな。ソッチの気は無いわ！」

及川と馬鹿な話をしながら俺は一悶着あるだろうと心の中で思いながら他を回ることにした。

「ご丁寧にもこんな真夜中に歴史館の扉が全開で、闘う場まで作って俺を待っているとはいったい何者だ？」

昼間歴史館で見かけた男は、あのとき俺に向かって『今晩、ここで待つ』と伝えてきていた。

それに乗った形で俺はここまで足を進めて来たわけなのだが…

俺の前に現れたのは明らかに俺に敵意を向けている。正直戦場に出たことの無い俺には怨まれる理由は無い。

『…北郷一刀。死ね！』

突き出された右拳を弾き俺は前方に回り受身を取り男と対峙する。

次に放たれた鋭い蹴りを腹で受けた俺は後ろにあったガラスのケースにぶつかるまで蹴飛ばされた。

『ふん。他愛ない…次ｄ「この程度…か」なんだと？』

蹴られた所についた足型を叩いて消す。どのくらいのものか受けてみたが圭吾さんの１０分の１程度の威力だった。

この程度なら刀を使うまでも無い。俺は拳を鳴らして男に近づく。

『…少しはやるようだな！』

男の拳が俺の脇腹に入る。にやりと笑った男の顔が少ずつ曇り驚愕の表情を映し出す。

俺の右拳が男の鳩尾に完璧に決まっているからだ。威力は圭吾さんの折り紙付き。

『ぐっ…がはっ』

俺の1発を喰らっただけで男は膝をついた。男の胸倉を掴んで目と目が合うを同じ高さのところまで男の身体を持ち上げる。

「で？　お前は誰だ。俺に何の怨みがある？」

『答える義理は無い！　北郷…お前は、俺が殺す！　ぐっ…』

むかついたので男の腹に膝蹴りを入れてやった。結構効いたみたいでむせ続けている。

『あらん？』

背中に氷を落とされたような味わったことの無い恐怖が俺の本能に逃げろと警鐘を鳴らした。

俺は男を放って声が聞こえた方に身体を向ける。

『ご主人さま…いい男に育って』

顔が引き攣るのが分かった。そいつを見た瞬間に母に会いたいと思ってしまった俺は仕方が無いと思う。

鍛え上げられた隆起した筋肉、黒光りする日に焼けた肌、おぞましいのはピンクのビキニを纏っていること。目の前にいる人間は間違いなくオカマ。

『左慈…いい加減にしたらどうなのん？』

『黙れ！　北郷を殺すことが俺の』

俺がここで逃げたらこいつは俺の家まで来るのか？　後ろの化け物も連れて？

駄目だ。今すぐ殺そう。別に人を殺すのはこれが初めてではない訳だし。

俺は刀剣コーナーのショーケースを砕き、中から青銅の剣を取り出す。握ると違和感があるものの使えなくも無い。

『武器を手に取ったところで！』

俺に向かってくる男。

俺は息を吸い込み構え地面を踏み砕き、一気に男の懐に入り込み男の右腰辺りから左肩に至るまでを斬った…つもりだったが、先に剣が折れ男の腹部の中心辺りで止まってしまった。

自分の身体に起こった出来事が理解できていないようなので、止めで折れた剣に狙いをつけて男を蹴り飛ばした。

口から大量の血液が零れ落ち、床一面に血の池が出来上がる。

「殺すと言ったんだ。殺される覚悟くらいあったよな？　左慈」

『北郷？　お前は…本当…に…――――――』

「俺は正真正銘、北郷家次期当主『北郷一刀』だ。って、もう聞こえていないか」

事切れた男の亡骸を見ながら告げた俺をただ見るだけのオカマ。

「あんたは何の用？　仇でも取るか？　相手になるぞ」

『左慈に関しては自業自得。仇も何も私たちは何度でも生き返るから気にしなくていいわん』

不死？　ふざけるなよ。俺は一生こいつらに追い掛け回されるのかよ。

『でも、左慈がやり過ぎたことによってここのバランスも崩壊しかけている訳だし、やっぱりこのご主人さまもごあんな～い』

「はっ？」

左慈の身体が光に包まれる。いや、光っているのは左慈の後ろにある銅鏡みたいだ。

俺はその場から離れようと身体を動かすが光が俺を包みこむほうが早く、俺は目が潰れてしまうかと思うほどの激しい光の中で俺は意識を失った。

序（後書き）

歴史館で闘いを終えた彼に待っていたのは眩いばかりの光。

いつの間にか気を失っていた彼の瞳に世界は容赦無く驚愕の事実を映し出した。

目の前に広がる何も無い荒野、ずっと先の方に広がる地平線。少なくとも故郷では見ることが叶わない景色。

呆然と膝をついた彼の元に近づく2つの影。

次回　『壱．降り立つ地』

「貴方は誰ですか？」

全てを失った武人と己の先行きが見えない恋姫が出会う。

壱

『壱．降り立つ地』

目の前に広がる景色に見覚えは無い。

『日本』にこんな景色を見ることの出来る場所など存在しない。それは確かだ。

なら…此処は何処なのだろう。

目の前に広がる砂埃が舞う草木が枯れてしまうほど荒れ果てた荒野。霞むくらい遠くの方に見える山々は岩山のように角張っていて、家の敷地内にあった山の姿とは掛け離れている。周りを見ると道らしきものはあるもののアスファルトで舗装されている訳でも石畳を引いた街道というものになっているものではない。人や馬、荷車が通った後のようにただ白い道筋が出来ているだけだった。

＊

俺は一通り考え込んだ後、道の跡を辿って歩みを進めていた。

道があるということはその先に街があるはずだ、そう信じて。

途中で街に向かう後方から来た商人のご好意に甘え、馬が引く荷車の後ろの方に乗せて貰い雲ひとつない空を眺めていた。高層ビルや

工場の煙突などが無い分、空がそのまま手を伸ばせば届きそうなほど近くに感じた。

「お兄ちゃんの服、きらきらしているね」

商人の娘らしき少女が俺の顔を見ながら鈴振るような声で問いかけ、母親らしき女性の膝から降りて俺の左側に座った。

合成繊維を使っているから光るのは当然のこと。だがそれを説明するのにはこの時代は似つかわしくない。

今は後漢の末期。英雄が犇めき合う三国志時代の幕が開ける少し手前辺りらしい。

商人が目指しているのは揚という街らしい。三国志のことは有名な武将や赤壁くらいなら知っているが地理関係は洛陽の位置と成都とか建業の名前を知っているくらいのものだ。揚と聞いて分かるはずが無かった。

学生服の袖に付いているボタンに興味があるのか小さくて細い白い指先でつついている少女。

母親らしき女性はそんな行動をしている少女を優しげに微笑んで見守っている。

「家宝だからね…詳しいことはお兄ちゃんにも分からないんだ。ごめんね」

嘘をついた。説明できるだけの知識はあっても俺に再現する力は無い。周りの技術力と俺の知識だけではどうしようもないから。

「ふ～ん…お母さん、分からないんだって」

「そっか…それじゃあ仕方ないよね」

「うん。ありがと。お兄ちゃん」

母親が少女を諭すと頷いてまた俺の隣に座る。

少女は最近のことで楽しかったこと、嬉しかったこと、疑問に思ったこと、驚いたことなど俺に聞かせた。母親が苦笑いして見守っていたことから、こうやって話すのが少女にとってのアドバンテージらしい。

俺が少女の話に喰い付き、そこで何を見たのか、そこで何をしたのか、そこで何を思ったのかを少女に聞き返すと、一瞬だけキョトンとした表情をしてまるで大輪の開いた花のような満面の笑顔をして嬉々と話し出した。少女は自分の話を聞いてもらったことはあったようだが、その時のことや行動・気持ちを聞かれたことがなかったそうだ。母親の俺を見る目が真剣なものに変わっている辺り、母親として学ぼうとしているのだろう。

身振り手振りを使って大らかに表現する少女に合わせて驚いたり、笑ったり、怒ったりする俺にどんどんテンションを上げていく少女。終には話しつかれて母親の胸を枕に可愛い寝息を立て眠ってしまった。

「子ども好きなのですね」

「子は国の宝…未来は今を生きる子どもが創る。歳を重ねた者が子

どもを大切にするのは当然のことだと思いますけど…」

茜色に染まる空を見上げながら俺はそう言った。

皇族だけを守護する北郷家の次期当主としてこれは問題発言だろう。

故郷では『天皇がいるからこそ国が成り立ち、皇族こそが国だ』と高らかに言っている。

俺の祖母と母はこれに異論は無い。

だが爺ちゃんと親父はこの主張に相違であった。この2人の考えこそが『国は民が作り、民こそが国だ』ということ。なんで2人がこんなことを言っているのかは後々話すとして、俺も2人の主張を色濃く受け継いできたわけだ。

「貴方みたいな人が役人になってくれれば、子どもが飢えで死ぬことはないのに…」

母親の呟きは俺の耳にしばらく残った。

俺は商人のおじさんと少女のことや今の情勢のことについて談話をして、夜空を見上げながら床に就いた。

＊

「重い…羽毛８０ｋｇ？」

俺が目を覚ますとにんまり笑った少女が腹の上に座っていた。

この娘は昨日の俺の対応に味をしめたらしく、しゃべりたくてうずうずしている様子が目に見えて分かる。

母親の方を見ると真っ白になって燃え尽きている。どうやら母親を攻略して俺を起こしに来たらしい。

俺が起きて座りなおすと怒涛のラッシュ攻撃。

ありとあらゆる場面のことを話してきた。いろんな街のこと、父親が売っているもの、友達のことなどだ。しかしギシアン場面を娘の前でやる親って…ちらりと母親と父親の顔を見やるとあからさまに目を背けられた。とりあえず、「弟か妹が出来るんだよ」と笑顔で言ってみたら母親に突撃して行った。

そんな平和な場面は唐突に終りを告げる。

馬の鳴き声とくぐもった悲鳴。異変に気付いて荷車から降りると男ばかり十数人。衣服はバラバラ。剣を持って御者を務めていたおじさんを脅している。

「荷持つと女を渡せ」

下品な笑いをしながら男達はじりじりと近寄ってくる。

俺は母親と少女の手を引きおじさんの元へ行き声を掛ける。

「俺が時間を稼ぎますから2人を連れて逃げてください」

3人の顔に驚愕の表情が映る。特に少女が俺の服を握り、いやいやと首を振る。

「時間がありません。振り返らずに街へ行ってください」

俺は前方にいた男4人を弾き飛ばし、馬の尻を蹴り上げ3人を荷車の中に放り込んだ。

少女の悲鳴が聞こえたが俺は気にすることなく男達に身体を向ける。男達の顔に映るのは憤怒。せっかくのカモを逃がした俺を許さないって言う感じが手に取るように分かる。

だが、全員が戦いにおいての素人だっていうのは剣の握り方や動き方を見れば一目瞭然だった。

俺は身を低くし、一足で一番手前の男の懐に入り込み、人体急所のひとつである水月に拳を叩き込んだ。水月を強打した場合、一時的に呼吸困難に陥る。それを狙って放った。

狙い通り泡を吹いて男は倒れた。男の手から剣を奪い構える。

「両刃か…歴史館の中でも思ったけど使いにくいな。だが文句ばかりを言うわけにはいかない」

目の色を変えた賊たちが群がるように俺の元へ殺到する。

俺は剣を大きく振り上げた男の首を刎ねた。

賊たちの目が点になる。俺が刎ね飛ばした首を宙で弧を描き地に落

ちて鈍い音を発した。
首を斬られた身体はそこに停止し前のめりに倒れた直後、地が噴出し血の水溜りを作った。
「まずは1人」
俺はそう呟いて思考が停止しているであろう近場にいた他の賊を切り捨てていった。

人間離れした俺の闘いぶりに、俺から最も離れた位置にいた男が恐れをなして逃げ出した。それが合図で生き残った者たちも一目散に逃げ出す。
このまま追撃して…とも考えたが、今回の目的はあの3人を無事に逃がすこと。あとのことは軍にでも任せればいい。
俺は馬車の後を追おうと足を向けようとして止めた。
賊が逃げ出した方角から人の集まってくる気配を察した。
人数は１００人くらいで、馬1頭が含まれている。恐らく跨っているのは賊の頭目であろうか。
5人殺そうが１０人殺そうが１００人殺そうが対して変わりは無い。むしろこういった生業を平然とやってのける者たちを殲滅できるというのであればと空を見上げる。

「昨日はあんなに晴れていたのに、今日は厚い雲に覆われている…か。一雨来そうだ」

俺は深呼吸をひとつして、向かってくる集団の先頭を走っていた男に狙いを定め駆け出した。

少女がきらきらしているといった制服は血に汚れ、俺の足元には血の池が広がる。その池には誰のものとは分からない臓物や腕、足、脳漿などが飛び散っている。

今回は逃げる者も殺した。それに関して後悔は無い。賊は賊。獣畜生の道に堕ちた者に情けは無用。

俺は奪った剣を放り捨てた。剣の刃は両刃ともボロボロで二度と使い物にはならないだろう。

頬に冷たい雫が落ちてきた。

ぽつりぽつりと降り出した雨はまるでバケツの水をそのまま引っくり返した時のような勢いで全てを流そうとする。

俺はただ厚い雲に覆われた空を見上げていた。

だから、声を掛けられるまで近づいてきた者たちに気付くことは無かった。

「貴方は誰ですか？」

聞こえた声に導かれ振り向いた先にいたのは、２人の少女。

１人は、薄紫色の髪を持ち、きめの細かい小麦色の肌。大きな瞳はまるで磨きかかったアクアマリンのように煌めいていて見るもの全てを魅了する。

もう１人は、濃い紫色の髪を束ね、武術を極めようとする者に見られる均整が取れた上で引き締まった身体、アメジストのような色をした瞳は俺を睨み警戒を怠らない。

「俺は…北郷。君達は？」

壱（後書き）

出会った親子を守るために賊を殲滅した武人。

しかし、その心は厚い雲に覆われたままの空と同じく晴れることは無かった。

だがそんな彼の眼に映ったのは優しき王の姿。

2人の少女との出会いが彼を動かす。

次回　『弐．王の条件』

「我が心を貴女に捧げる。我は四家がひとつ北郷家の次期当主、北郷一刀」

忠誠を見せる武人と戸惑う幼き王。2人の思いが交錯する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0034h/

「恋姫の世界に」

2010年10月10日07時10分発行